



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

# 世界の文学

10

バルザック

ウジェニー・グランデ

谷間のゆり

田村 俣訳

寺田 透訳

中央公論社

世界の文学 10

©1965

---

バルザック

訳者 田村 俣  
寺田 透

昭和40年12月1日初版印刷  
昭和40年12月10日初版発行

価 390 円

---

発行者 宮本信太郎

本文整版印刷 三見印刷株式会社  
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社  
口絵印刷 東京プロセス株式会社  
本文用紙 三菱製紙株式会社  
クロス 日本クロス工業株式会社  
製函 加藤製函印刷株式会社  
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地  
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

ウジエニー・グランデ

谷間のゆり

解説  
年譜

3

221

538

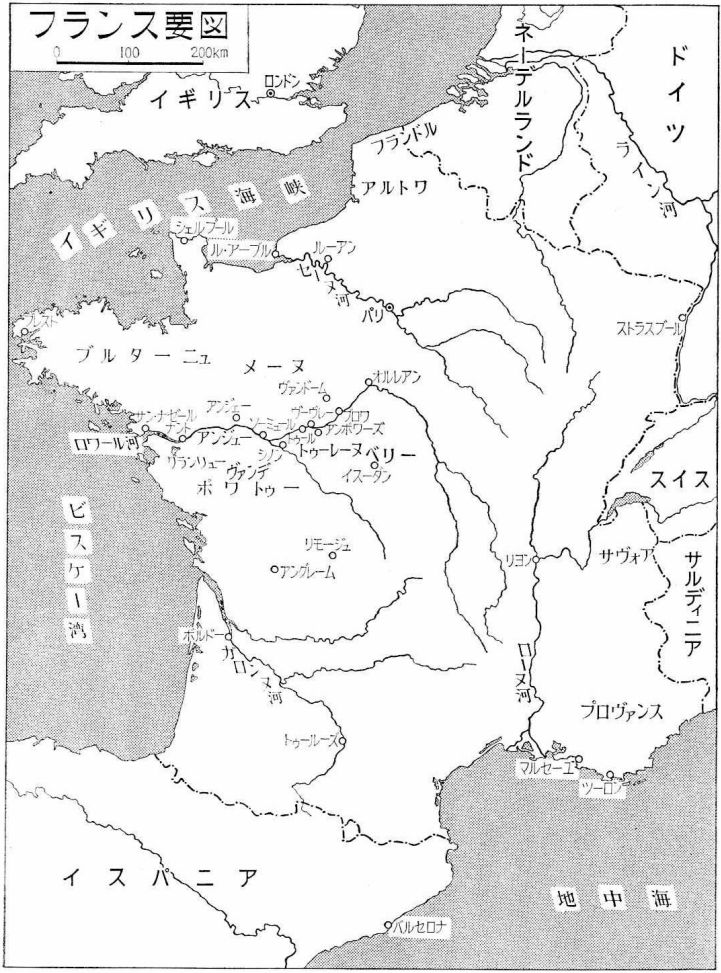
558



ウ  
ジ  
エ  
ニ  
ー  
・  
グ  
ラ  
ン  
デ

# フランス要図

0 100 200km



## マリヤに\*

御身の姿こそこの物語のこよなく美しき飾りなれば、ここに御身の名、聖なる黄楊つばきの枝えだのごとくあらんことを。いづくの木より手折りしかは知らね、まこと御教えによりて聖なるものと崇められ、信仰あつき手によりてつねに新たに緑なす、家の護符たるかの黄楊の枝のごとく。

## ド・バルザック

\* マリヤ・デュ・フレネーを指す。『ウジエニー・グランデ』執筆当時（一八三三年）、バルザックの恋人だった女性。彼女は一八〇九年に生まれ、一八二九年にシャルル・アントワーヌ・ギイ・デュ・フレネーと結婚しているが、一八三四年六月に生まれた彼女の娘は、バルザックの子と推定されている。この献辞もほのめかしているように、本編のヒロインであるウジエニー嬢の姿には、マリヤの面影が残っているようである。

\*\* 黄楊の枝は、枝の日曜日（復活祭直前の日曜のこと）に、カトリック教会できよめられる。信者はそれを家に持ってかえり、お守りとして一年じゅうあがめる。





## 町民風俗

田舎のいくつかの町にいくと、ちらっと見ただけで哀愁を感じさせるような家に出会うことがある。陰気な修道院、ひっそりとした荒野、いたましい廃墟などをながめたときにも、それと同じような思いにさそわれるけれども、そうした家にはおそらく、修道院のわびしさも荒野の味気なさも廃墟の残骸もともに存在しているにちがいない。日常の生活といい人々の動きといい静まりかえっているので、よそからやってきた人間ならば、ここは無人の家と思いかねない。ところが聞きなれぬ足音を耳にして、世捨て人のような顔が窓の手すりからのぞき、じつと動かぬ人影がどんよりとした生気のない目をむけてよこすので、はじめてこの家にも人が住んでいるなということがわかる。

ソーミュールの町の高台、城に通じる起伏のおおい坂道のはずれにある一軒の家も、そのたたずまいからして、やはりこうした哀愁の本性を秘めている。夏は暑く、冬は寒く、場所によっては薄暗いその坂道は、いまはあまり通る人もない。小石が一面に敷きつめてあり、いつも

ほこりもたたず乾いているので、足音がよく響くこと、まがりくねっていて狭苦しいこと、道にならんでいる家が妙に静かなこと、こうした特色が目につく。そのあたりは旧市街の一部であって、城の外郭のちょうど真下に位置している。

木造ではあるが、三百年の星霜をへた建物が、そこには今もなお堅固に立ちならび、それぞれ違った表の構えなので独自の趣きがあつて、故事研究者や芸術家はそのためソーミュールのこの一郭に注意をうながされる。実際このあたりの家のまえをとおつていくとき、建物の正面の途方もなく大きい厚板の装飾を見あげて感心しないものはない。それは端のところ、奇妙な形に彫つてあつて、たいいていの家の一階の長押を黒っぽい浮き彫りで飾っている。

ある家では、梁が石盤石でつつみかくしてあり、もろい壁のうえに青い縞模様を描いている。そのうえにのっかっている間柱組みの急勾配の屋根は、長い年月をへたためにたわみ、屋根を葺くくさりかけた柿板が雨にたたかれ日光に照りつけられて、ねじまがっている。また別の家では、使い古した黒ずんだ窓の手すりが目につくが、そのこまかな彫刻のあととはもうほとんどわからない。その手すりはどっしりしたものではないので、そのうえに

のつかっている素焼きの植木鉢がいかにも危なっかしい。植木鉢のそとまで枝をひろげているのでしこやばらは、おそろく哀れなお針子のものにちがいない。すこし先へいくと、おそろしく大きな鋏を打ちつけた正面扉があつて、そのうえには氣転きくわんのきく器用なわれらの先祖がきざみつけた訳のわからぬ文字が見られる。その家の過去の歴史にかかわるものであるらしいが、その意味はとても判読できない。新教徒が書いた信仰の誓いのようなものもあるし、カトリック連盟の同志の筆になるアンリー四世にたいする呪いの文句も認められる(アンリー四世はナントに信仰の自由を許した。の勅令を發布、新教徒に位一五八九一—一六一〇)。《鐘の貴族》(地方自治功勞者は貴族の爵位を授かつた)をしめす記章も彫りつけてあるが、これは有力な商人かだれかの手になるものであろう。町役人をつとめた榮譽のしるしなのだが、今ではそんな昔の官職を思い出す人もいない。こうした扉にはフランソアの歴史が、そっくりそのまま残っているのだ。漆喰や煉瓦を塗りこんだ荒壁の家もある。職人が腕によりをかけて頑丈がんじょうにこしらえたものなのだが、今ではぐらぐらしている。かと思ふとその隣りには、貴族の邸宅がそびえている。アーチ形の石造りの正門のいただきにはこの貴族家の紋章のなごりが見てとれるが、その紋章も、一七八九年以来この国を騒がせたさまざまな革命のおかげでとりこわされたのだ。

この町筋では、商売に用いる一階はいわゆる店舗の体裁をととのえてはいない。中世紀を愛する人なら、われらの父祖の時代の《作業場》を、単純素朴なかたちでそこに見出したような気持ちがあるにちがいない。天井のひくいその広間は、店頭というほどの構えもなく、陳列台もガラス戸棚も見あたらない。奥行きがあつて薄暗く、しかも家の内外どこにも裝飾がない。出入り口の扉は、ぶさいくに金具をうちつけた堅木づくりで上下ふたつの部分にわかれる。上半分は家のなかにたたみこむようになつてゐるが、下半分にはばね仕掛けの呼び鈴がついていて、たえず開いたり閉まつたりしている。外氣と日光が、しめつぼい洞穴ほらあなめいた広間へ入ってくるのは、たたみこまれた扉の上の部分から、さもなければ、天井と床板のあいだの低い壁の空間からである。胸ほどの高さのその壁には、頑丈な鐵戸がはめこんであつて、朝に取りはずし夕方にはまたはめこんで、鉄の横棒でささえたりえポルトでしめる。その壁は商品の陳列に用いてある。そこにはどんなごまかしも見られない。何を商うかで商品見本もまぢまぢだ。二、三杯の桶おけに塩や鱈たらがつめこんであつたり、帆布の包みや綱のたぐいがころがしてあつたり、天井の梁から真鍮の針金がぶらさがつていたり、壁に樽たるのたががもたせかけてあつたり、棚にラシャの反

ものがのせてあつたりする。

店のなかに入つてみよう。白い肩掛けをし、赤い腕をむき出しにした、若いさかりの身ぎれいな娘が編み物を止めて、父か母を呼ぶ。どちらかが出てきて、こちらの望むがまま何でも売つてくれる。冷淡だとか、愛想がないとか、おうへいだとか、売る態度もさまざまだが、それは商人の性分しょうぶんによるのであつて、買う品物がただの二スー二スー（二フラン）だろが二万フランしようが、値段によつて左右されるのではない。

戸口に腰をおろして、隣り同士ひまつぶしに世間話をしているのは、桶板おけい商人だ。見かけたところ、店先にはせいぜい酒びんの下敷きにするくらいくらいの粗末な板と、小割板せりの二、三束を出しているだけだ。ところがどうして、河岸には原木のぎつしりつまつた材木置場をかかえていて、アンジュール地方の酒樽屋さかだんやという酒樽屋の注文を一手に引き受けているといった男である。ぶどうが豊作ならば、いくらで樽を売りつけることができるか、ほとんど板一枚のくるいもなく、ちゃんと心得ているのだ。かつと太陽が照りつけられ、この男は大金持ちになるし、雨つづきだと身代しんたいもあぶなくなる。たったひと朝のうちに、樽の値段が十一フランにもはねあがるかと思うと、六フランにまでさがつたりする。

トゥーレーヌ地方とおなじようにこのあたりでも、商業は天氣の移りかわりに左右される。ぶどう栽培者も地主も材木屋も樽屋も宿頭も、ただ一筋の日光を待ち望む。夜中に霜の降つたことを明くる朝になつて聞かされるのではないかとびくびくしながら、夜の眠りにつく。雨と風と旱魃かんばつを恐れるが、水や暑さや雨雲を思い思おもいにかつてに欲しがる。空模様と地上の利害のあいだには、年じゅう果たし合いがたえない。晴雨計の針がどこをさしているかで、人々の顔はくもつたり、明るくなつたり、陽気になつたりする。

誰かが、「ほら、黄金こがねの空だ」という。すると、その言葉は、昔ソーミユールの大通りだったこの町筋のはしからはしまで、戸口から戸口へ合図のように伝わっていく。そこで、誰もが隣りの人に「金貨の雨ですな」と答える。適当に日光がさし都合よく雨が降れば、ふところところに何がころがりこむかを、めいめいちゃんと心得ているのである。天氣のいい夏の土曜の昼ごろ買物をしようとしても、これらの実直な商人の店ではたつた一スーの品物でも買うわけにいくまい。だれもかれも近郊にぶどう畑や小さい農園をもつていて、週末の二日を過ごしにくいのだ。この町筋では、商品の仕入れも販売も利益も、なにもかまがあらかじめわかっているので、商人たちは

十二時間のうち十時間というものをつぶして、愉快に勝負事をしたり、たえず他人の動静を観察するとか批評するとか探りをいれたりするしまつである。どこかのおかみさんが鷓鴣しやこの一羽でも買えば、亭主のほうはきまつて隣り近所の人から鷓鴣の焼き加減はよかつたかどうかと聞かれる。若い娘が窓から顔でも出そうものなら、たちまち暇な連中に目をつけられる。そんなわけで、この町筋では人間の心のなかも互いに透けてみえるのである。これらの家々が、奥行きも知れず、暗く、静まりかえっているのに、これといってとくに秘密などないのと同じことだ。

ここの人々はたいいていつも家の外で暮らしている。どこの世帯でも戸口へ腰をおろして、そこで朝飯も食うし晩飯も食う。けんか口論もそこでする。犬の子一びき通つても、きつとあら探しをされるといった調子だ。で、昔は旅のものがこうした地方都市にやつてくると、通り過ぎる門口ごとに冷やかされたものである。おもしろい小話もそんなことから生まれたし、町方ふうの冗談のうまいアンジェーの町民が《冷やかし屋》というあだ名をつけられたのも、そんな理由からである。

旧市街の古い屋敷は、昔この地方の貴族たちが住んでいたこの通りの上手かみてにならんでいる。この小説の物語の

いろいろな出来事がおこつた哀愁にみちた家というのも、まさしくこうした屋敷のひとつだった。これらの屋敷は、事物にしろ人間にしろ単純素朴という特色をちゃんとそなえていた過ぎ去つた時代の尊重すべき遺物なのであつて、今日ではその特色がフランスの風俗から日に日に失われていく。

目立つた趣きのあるこの坂道では、ごくささいな場所が昔の思い出を呼びさますし、全体の印象が人々を無意識のうちに一種の夢想にさそいこんでしまふ。右に左にまがつているこの坂道をたどつていくと、かなり薄暗くてぐつと引つ込んだ場所が目にとまる。そのまんなかあたりには、実はグランデさまのこの屋敷の玄関口がかくれている。

だが、グランデさまのこの屋敷という田舎ふうの言いまわしのおもしろさを理解するためには、グランデ氏の生い立ちを述べないわけにはいくまい。

グランデ氏はソーミュールの町では評判のたかい男だ。名物男になつた由来とかその結果とかは、多少とも田舎暮らしをした人でないと、まるつきり見当がつくまい。

いまだにグランデどんなど呼んでいるものもあるにはあるが、そんな呼び方をする老人はもう目に見えて減っている。大革命のはじまつた一七八九年ごろ、グランデ



氏は読み書きそろばんのできる、しごく裕福な酒樽屋の親方だった。フランス共和国政府がソーミュール郡で僧侶階級の没収財産を公売に付した時分(つまりフランスの大革命の初期)、この酒樽屋はそのころ四十歳で、ある金持ちの樽板商人の娘と結婚したばかりのところだった。グランデは自分の現金と女房の持参金とを合わせた二千枚のルイ金貨(フラン)をふところにして郡役所へ出かけた。そして没収財産売却の監督にあたっていたこちこちの共和政府役人に義父からもらったドゥブル・ルイ貨二百枚(四千八百)をにぎらせて、郡でも一番みごとなぶどう畑と古めかしい修道院と折半小作地(取益)とを、ただも同然の値段で、道理にはかなくていいが法律上では手抜きなく、自分のものにした。

ソーミュールの住民たちはいっこうに革命的ではなかったので、グランデどんは度胸のある男、共和主義者、愛国者、新思想にかぶれた男だということになった。が、その実は酒樽屋らしく単にぶどう畑にほれこんだだけのことだった。ソーミュール地区行政委員に任せられたにもかかわらず、政治的にも商業的にも、温和な勢力をふるった。

政治的には旧貴族をかばって、亡命貴族の財産の公売には力のおよぶかぎりじやまをいれた。商業的には、共

和政府の軍隊に白ぶどう酒をもの千樽か二千樽ほど納入して、代金がわりにある女子修道院附属のすばらしい草刈り場を手にいれた。この修道院というのは政府が最後の公売用に残しておいたものである。

統領政府の時代(ナポレオンが統領となる。一七九九—一八〇三)になると、グランデどんは町長になった。町の治めかたもなかなか賢明だったが、ぶどうの収穫のほうはなおさらみごとにやっていた。ナポレオン帝政の時代(一八〇四—一八一四)になると、グランデ氏と呼ばれるようになった。ナポレオンは共和主義者を好かなかったため、赤い帽子をかぶった過激共和派だといううわさのたかいグランデ氏をやめさせて、その後任には、もともと貴族でのちに皇帝から男爵をさずかった大地主をすえた。グランデ氏はなんの未練(未練)もなく町長の榮職を去った。実はすでに在職中、町の利益のためにすばらしい道路を数本こさえさせていたが、それはどれも彼の所有地へ通じるようになっていた。家屋敷にしろ地所にしろ、土地台帳にはとびきり割よく記載してあったので、税金も普通の人なみに支払えばよいことになっていた。あちこちにある彼のぶどう園の格付けがすんで以来、日頃の手入れがゆきとどいているので、そのぶどう園はこの地方の土地頭になっていた。これはそのほうの専門語で、極上のぶどう酒を産する畑という

意味である。だから彼には、レジオン・ドヌール勲章下賜を申し出るくらいの資格が十分あったわけである。

町長解任のこの出来事があつたのは一八〇六年のことであつて、当時グランデ氏は五十七歳、夫人のほうはかれこれ三十六だつた。夫妻のあいだには、ひとり娘が正当な愛の結晶として生まれてしたが、それが十歳になつてゐた。

町長をやめさせられたこの男を慰めてやろうという天のおぼしめしだらうか、この年グランデ氏は、いくつかの遺産をつぎつぎと相続した。妻君の母親にあたるラ・ベルテリエール家出身のラ・ゴードイニエール夫人の遺産、この亡くなつた夫人の父親、ラ・ベルテリエール老人の遺産、さらに母かたの祖母にあたるジャンチエ夫人の遺産である。このあいづぐ三つの遺産の総額がどれほどのものになるか、それはだれにも見当がつかなかつた。この三人の老人は実はひどいけちん坊で、ずっと昔からためこんでいたが、それは人にかくれて金貨の山をうつとり眺めるだけだつた。ラ・ベルテリエール老人にいたつては、高利貸しをしてもうけるくらいなら、金貨の顔をおがんでゐるほうがまだしもはるかに利得が多いというわけで、金を貸しつけたりすることは散財も同然だというしまつた。そんなわけで、グランデのためた財

産がいくらになるかということについては、ソームユールの人はだれの目にもはつきりしている不動産からの収入で見当をつけた。

グランデ氏はそこで新しい爵位を獲得した。なにかにつけてすぐ平等平等と主張するわれわれも、この爵位ばかりは抹殺するわけにはいくまい。彼は郡で最高の多額納税者になつたのである。百アルパン(アルパンは約四十二クタル)の畑でぶどうを栽培してしたが、豊作の年には七、八百樽のぶどう酒がとれた。折半小作地を十三個所も持つていたし、例の古ぼけた修道院も持つてゐる。税金のかからぬようにと、このしみつたれは修道院のガラス窓やアーチ型の窓飾や焼き絵ガラスなどを壁でふさいでしまつたが、そうすることで保存もきくのだった。まだほかに草刈り場が百二十七アルパンもあつたが、一七九三年に植えた三千本のポプラがおいしげつて大木になつてゐた。最後に、いま住んでゐる屋敷も自分の持ち家であつた。

そんなわけで、目に見える不動産のほうははつきりしてゐた。だが現金ということになると、わずかにふたりの人物だけが、たいした額らしいということ、ほんやりと推定できたにすぎない。ひとりは、グランデ氏の金を高利にまわすことを任されてゐる公証人のクリュシロ



氏、もうひとりにはソーニールでももつとも富裕な銀行家のデ・グラッサン氏であるが、グランデは自分に都合な時にだけこの銀行家のもうけ仕事にこっそり首をつっこむのだった。ひどく口がかたいということは田舎では信用と財産を生みだすものになるが、クリュシヨ老人もデ・グラッサンもそういう性分しやうぶんであるくせに、いざグランデ氏に面とむかうと、人の前もはばからずいかにもうやうやしげにふるまつた。で、おべんちやらめいたふたりの礼のつくしかたから見て、目のよくきく人ならば、元町長の財産がどんなに巨額のものか、およその見当がついたはずである。

グランデさんのところには特別の金庫かねくらがあるらしい。金貨のぎっしりつまつた秘密の隠し場所があり、夜ともなれば黄金の山に見とれて、言葉につくせぬ楽しみにこっそりふけているらしい。そんなうわさを聞かされて、なるほどと本気にしないものはソーニールにはひとりもない。とりわけ町のけちん坊どもは、グランデの目が金貨の黄金色にでも染まつたような色をしているのを見ると、やっぱりうわさのとおりと思ひこむのだった。貸した金に途方もない利子をかせがせるくせのある人間の目つきは、好色な男や賭博者や宮仕えの役人の目つきとおなじく、なんとも説明しがたい癖がしみこむ運命に

なっている。ちらつと盗み見みし、がつがつと物欲しそうで、なにか隠しだてしているような目の動き。それは同じ宗旨のものが見ればひと目でわかる。普通のひとには通じないこうした言葉こそ、情熱の徒のいわば秘密結社を形づくる。

グランデ氏はだからも非常に尊敬されていたが、それも当然のことだった。もともと彼はどんな人からも何ひとつ借りたおぼえはなかつたし、老練な酒樽屋、老練なぶどうつくりとして、収穫したぶどうのために樽をこしらえる必要があるとき、千樽とふむか五百にとどめるかを、まるで天文学者のように正確に見抜く男である。やまをはるが一度もはずれたことがない。ぶどうよりも樽のほうが高値をよんでいる場合は、いくらでも売りさばくぶんの樽をきまつていつも持っているし、小さなぶどう園経営者が一樽百フランで出荷している場合、こっちは取り入れたぶどうを穴倉にしまっておいて二百フランで売り出す機会を待つことのできる男なのだ。人から一目も二目もおかれるのはあたりまえだった。名高い一八一年の大豊作（ぶどうの豊作と豊）のときも、りこうに立ちまわって倉へおさめておいたぶどうをゆっくり売りさばいたので、二十四万フラン以上の金がふところになり込んだ。